

## 政治問題としての教政政治：エジプト政治史に顧みて（アリストテレス宗教・政治学のエン源）

その他のタイトル	Hirocracy as a Political Issue (The Origin of Aristotle's Religious and Political Sciences) : Didactic History of Egyptian Politic
著者	池田 栄
雑誌名	關西大學法學論集
巻	13
号	4-6
ページ	641-661
発行年	1964-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00027620">http://hdl.handle.net/10112/00027620</a>

# 政治問題としての教政政治

— エジプト政治史に顧みて —

(アリストテレス宗教・政治学のエン源)

池  
田  
栄

目 次

1 緒 論

2 本 論

**A** アフヘンニアトン王の祭政分離的平和政策

**B** アリストテレス宗教・政治学の基礎としてのアフヘンニアトン王の宗教・政治思想

Contents

1. Introduction

2. **A** King Ikhnaton's Separatistic Pacifism

**B** Ikhnaton's Religious and Political Thoughts underlying Aristotle's Equivalent Sciences

## 1 緒 論

祭政分離 (separation of church and state) に対する祭政一致 ([unity of] church and state) は、神政政治 (theocracy) であれ、教政政治 (hierocracy) であれ、すでにながいあいだ、前近代的な現象あるいは avant-guerre 的な現象と考えられていたが、最近の現象を見ると、極端なる祭政分離に対する反動として現実の政治問題に化している傾向がある。しからば民主政治 (democracy) とそれに基づく法の支配 (rule of law) に対する、最近における二つの大なる妨害は極端なる祭政分離というべき科学的、唯物論的革新思想とうえの(1)とき祭政一致の思想である。(2)の兩者を防止する有力なる方法の1つとして、国家の健全なる経済政策とならんで、帝王のプレステイジ (prestige) が大いに必要であることは西ヨーロッパにおいてイギリスやデンマークなどの立憲君主政の繁栄、わが国における天皇制の存続がこれを証明して余りがある。けだしかくのごとき君主政・天皇制に見るプレステイジは殺伐たる唯物論を阻止するとともに中正なる宗教的認識への道を開くに役立つからである。思うに、中正なる宗教的認識は仏教において法身(ホッシン)説法に偏せず、応化身(オウゲシン)説法に片寄らず、キリスト教においては極端なる Unitarianism に墮せず、また教会万能を主張する宗教政治を主張しない。

(1) かかるプレステイジについては自著、王冠の政治学的意義(昭和38年版)参照。

以下に論述するところは(1)古代エジプト政治史におけるアフエンニアトン王の祭政分離の平和政策を論じ、さらに(2)アリストテレス宗教・政治学の基礎としてのアフエンニアトン王の宗教・政治思想に及ぶものであり、その(1)は今日における教政政治の問題を解決するに大いに参考となるものであり、その(2)は西ヨーロッパ政治学の基礎を

なすアリストテレス政治学に関するそのエン源のナゾを解決しようとするものである。

もちろん国会政治と民主的な法支配の祖国はイギリスであり、かかる民主政治の指針は一般的にはイギリス憲法史 (English Constitutional History) に求めるをもっとも得策とする。しかしイギリスは祭政分離を古来の特色とし、その国家が神政政治または教政政治の圧力を体験したことは例外的時代においてのみであり、しかもその圧力は他の西洋諸国の場合ほどに強烈ではなかった。これに反して古代エジプトはもっとも強力なる教政政治とそれに基づく帝國主義的侵略の連続をその特色とし、ただアフエニオン王の時代のみはまったく例外的な祭政分離の平和政策の時期である。しからば王のこの偉業はこれを知ることによって、最近における政治問題としての教政政治を解決するに直接にもっとも役立つとともに、この偉業を知ると否とに関係なく、王の政治思想の長所は、すでに述べたアリストテレス政治学を通じて、間接に今日の民主政治に貢献していることが少なくない。しかも数多き古代エジプトの有力なる諸王のうちにあつて、王のみはひとり有形の大墳墓もオベリスクも残さなかつたが、今日のわれわれこそはこの偉大なる思想的恩人に対し、いたるところ小なりとも無形の記念碑を立てなければならぬと思う。

なお引用するエジプト語については、印刷の都合から、全部ローマ字に transliterate することになつたが、まずその transliteration を示し、つぎにローマ字の音訳を示し、必要に応じて英語化あるいはギリシヤ語化された音訳を [E] あるいは [G] と書いて記入した。エジプト文字の入門的説明については加藤一朗氏著「象形文字入門」(中公新書) によられたい。またエジプト語の発音において語尾の父音とつぎの語首の母音との間には、ギリシヤ語の場合の *glottal stop* が存し、英語の場合の *linking* が存しないことを注意すべきである。従つてアフエニオン王と記し、アフエナトン王と書かない。

## 2 本 論

### A アフヒーエンニアトンの祭政分離的平和政策

エジプトが統一国家となり、メンフィス ([G] Memphis) を首都として第1王朝の成立して(前3300年頃)からエジプトはアレクサンドロス大王の征服(前332年)までここを首都する王国であるが、第21王朝までを見るに、第3王朝から第6王朝までを古帝国(the Old Empire)時代とすべく、その第4王朝には、前3000年頃に中央集権確立し、王権は強力無比で大ピラミッド(great pyramids)群が造営された。しかるに第7王朝から第10王朝まではエジプト人の間における群雄割拠の時代となった。

のちに第11王朝に至り、首都をテーベ([G] Thebai, [E] Thebes)——ギリシヤのテーベでなく、エジプトのウヘセッテ(Wst, Waset)‘別の名はネウエ(Njwft, Newt)<sup>(3)</sup>——に遷都し、第11王朝(前2160—2000年)、第12王朝(前2000—1784年)<sup>(3)</sup>の時代は中帝国(the Middle Empire)の時代とすわれ、この時期はふたたび統一国家の実をあげていた。

(1) エジプト語 *rojwft* は普通名詞として「まち」を意味する。  
(2) 前約2500—2300年 (Meyers)。

このときに至り、エジプトにおける従来の純然たる多神教が主神を認めることとなり、支配種族の主神を全民族の主神とした。これは太陽神ラー(レ) (R, Ra, Re)とアモン(アメン)神(Amn, Amon, Amen)の結合された自然神たる太陽神であり、アモンニラー(アメンニラーなど) (Amm-R)と称せられ、アモンニラーはしばしば単にラ

ー(レー)と略称された。これよりさき太陽神ホルス([L]Horus, [G]Hor)——エジプト語ではヘル(ホル)(Hrw, Heru, Horu)——の信仰は存したが、これは西方(サイホウ)にあって死者を支配する神オシリス([G]Osiris)——エジプト語ではウスニアル(Ws-jr, Usar)——の子であり、アモンニラーのごとき主神ではなく、この世における生存者のみを支配する神であると信ぜられた。かくて主神たる太陽神アモンニラーの信仰は中帝国時代に始まるが、この時代、国王は「ラーのムスユ」(sr, sa-Ra)と称せられてアモンニラーの化身とせられ、法的には神政政治が認められたが、事実上はテーベの神官団による教政政治が行われた。

この中帝国時代とのかちの新帝国時代にエジプトは他国を侵略戦争によって征服し、中帝国時代には被征服民は朝貢と軍事奉仕のみを行ったが、新帝国時代からは主神をかつぐ新政政治により、内政にまで干渉せられた。従ってこの主神は愛の神でない正義の神であったと考える。<sup>(1)</sup>なお帝王の墓の古帝国時代のもの中帝国以後のものとを比較することによっても神のこの性質が明白となる。また経済は中帝国時代はまだ自然経済であったが、新帝国時代からは貨幣経済が行われた。

(1) これよりさき、エジプトの純然たる多神教時代から愛の神でない正義の神が尊ばれた。「この世においても」とも美しいものは何か。」とオシリスが子のホルスに問うた。「親の仇を報することである。」と答えたホルスによって悪魔セート([G]Seti)——エジプト語ではセテシュ(Sst)——またはセテフ([Sst])またはステフ([Sst])——が復讐セウされた。以上の神話が存する。

しかれば何故うえのごとき教政政治が行われたか。それは中帝国以前の群雄割拠いらい国王にプレスティージはまったく存せず(アフニエンニアトンは例外)、エジプトによる外国征服は主神のご利ヤクによるとせられ、莫大の富がテーベの神官団に与えられ、中帝国、新帝国時代——アフニエンニアトンを除く——を通じ堂々たる神殿の建築が行われたためである。<sup>(4)</sup>

(1) ルクソル (Luxor) カルナック (Karnak) の両神殿はテーベ付近に第18王朝の初頭に建設され、アブシンメル (Abusimbel) 神殿は第19王朝のラムセス (R<sup>1</sup>-ms<sup>w</sup>, Ramesses) の2世—英語ではラムセス (Ramesses) の2世—がこれを建造した。昭和38年 (1963年) に東京および京都に催されたエジプト美術5000年展のヌローガンはダム建設の犠牲とならうとするこの神殿を救えと言うにあった。

中帝国時代ののちヒクソス ([G] Hiksôs, [E] Hyksos) <sup>(3)</sup> —— エジプト語のククシヤス (hqw-š<sup>1</sup>sw<sup>2</sup>, hequ-šasu, hequ-shasu, princes of the Bedouins) の支配を経て新帝国 (The New Empire) 時代に入るが、この時代は第18王朝 (前1580—1321年) から第20王朝あるいは第21王朝に至る時代である。この時代も、すでに述べたごとく、神政治の形式で教政政治が行われ、ただアフエンニアトンの時を例外とする。この新帝国時代に外国人がエジプト国王を Pharaoh と呼んだのはエジプト語のハルニアオ (ハルニア) (pr<sup>1</sup>o, pr<sup>1</sup>a, per-ao, per-aa) から出たと一般に考えられているが、pr = [E] house; 'o, 'a = [E] great であるから、第18王朝に入ってから国王の神聖がとくに強調せられ、そのために王家内の血族結婚が原則として行われていたために外国人がエジプト国王をうえのごとく称したと考える。これについて、アフエンニアトンの母は王家の人ではなかった。

(2) Hyksos の原エジプト語の *hiksu* (カウ) = カシニート (Theka-khasu, rulers of foreign countries) *h<sup>1</sup>sk<sup>1</sup>os* (hek-khos, ruler of barbarians) であることがあつた。ヒクソス王朝はエジプト第17王朝のときに入つたもので、そののちエジプトの大半を支配し (約100年間)、テーベのエジプト王朝はそれに朝貢した。第15、第16王朝がヒクソスであったとも言われている。

このアフエンニアトン王は *am<sup>1</sup>men* = *am<sup>1</sup>en* (Jm-n-tp, Amen-hotep, [G] Amenophis) の *am<sup>1</sup>*、*en* は *am<sup>1</sup>en* = *am<sup>1</sup>en* 4世と称せられたが、この旧名はアメンすなわちアメンニラー (アメンニラー) は *am<sup>1</sup>en* = *am<sup>1</sup>en* 義のエジプト語であるが、アメンニラーの信仰を改革しアテン (Jm, Aten, Aton) の信仰を確立しようとした王は *am<sup>1</sup>en* から *am<sup>1</sup>en* = *am<sup>1</sup>en* = *am<sup>1</sup>en* (A-ten) (Jh-n-Jm, Ah-en-Aton, —Aten) —— アテンの輝き、またはアテンの恵み

の義——と改名し、王の始めた新都もアハット<sup>(a)</sup>アトン (Jbt?Jm, Ahet-Aton)——アトンの地平線の義——と名付けた。英語のイクナトン (Ikhnaton) は王の名のイギリス的なまりである。

(1) 今日のテル<sup>(b)</sup>ニエル<sup>(c)</sup>ニアマルナ (Tell-Amarna)。

このアフ<sup>(d)</sup>ニエン<sup>(e)</sup>ニアトン王が多神教のエジプトにおいて初めて、いな世界において、イスラエル人とともに、初めて一神教を主張した。この場合の唯一神をうえのごとくアトン (Jm) と称し、アトンとは太陽 (sw) の円盤を意味し、アトン神はまたラー<sup>(f)</sup>ニヘル<sup>(g)</sup>ニアフテ (R-Hr-Jbti?, Ra-Her-abte, [E] Ra-Herakhty, Ra-Horakhte)——地平線のホルス (Horus of the Horizon) たるラーの義——と称せられる。神としてのアトンは自然神としての太陽神ではなく、唯一神の愛の現われ (manifestation) としてのアトン、すなわち目に見える太陽円盤 (Aton, the visible disk of the sun) を信ずるがゆえのアトン神である。従ってアフ<sup>(d)</sup>ニエン<sup>(e)</sup>ニアトン王の宗教はキリスト教ユニテリアンのなる信仰であり、仏教でいう法身 (ホッシン) (本地身) 説法を認めるものであった。王は若くしてこの世を去り、この法身説法の信仰をさらに深めて正しい意味の応化身説法の信仰としても発表するに至らなかった。しかし王はこの法身説法の考えによって、たとえ王の一代間であったにせよ、教政政治を廃止することができ、さらにアトンの愛によって侵略戦争を放棄し、被征服地の独立要求を許した。ここに王の政教分離の平和政策を見る。しこうしてこの政策を成功せしめた原因は(1)王がそのすぐれた宗教思想による徳に基づきプレスティージを有していたこと、(2)王が十分な経済力を有してテーベの神官団のレジスタンスを制圧することができたことが主要なるものである。なお王が首都をテーベからうえのアハット<sup>(a)</sup>アトンへ移したのはテーベの神官団の圧力に対する、慎重なる王の考慮としてわが平安遷都を連想せしめる。

わが奈良朝における教政政治への危機は朝廷の経済的貧困に基づくが、この貧困は平城京の擁つ立て式建て物によつても明白である。平安遷都が朝廷によって企てられたのは、(1)秦氏の経済力を利用するためと、(2)教政政治企図の本拠たる平城京の地を遠く離れて仏教的圧力団体の勢力を少しでも避けようとする慎重さにあった。かくて平安京の初めに教政政治への危機を脱した主要な原因として桓武天皇のプレステイジを認めねばならぬことは言うまでもない。

- (1) 自著、フリストテレーヌ政治学の基礎、54頁。  
(2) 自著、前掲、55、56頁。

うえのごとき、アフェンハートン王の一神教につき、この信仰を裏書きするものはイスラエル人のエジプト移住とその出エジプト (the Exodus) ではなからうか。エジプトにおけるイスラエル人に関しては、これをヒクソスとそれに率いられた外来民族と同一視する学説があり (Josephus)、またこのイスラエル人がヒクソス王朝時代に移住し、新帝国時代の第19王朝時代 (その前1230年頃?) に退去したとの説がある。しかしヒクソスとは、すでに述べたごとく、princes of the Bedouins を意味するエジプト語の外国語化したものであり、従ってヒクソス族はネドゥイン人 (the Bedouins, the Bedawin) であり、アラブ人 (the Arabs) の一派である。アラブ人はサラセン人 (the Saracens) ともいわれ、これに2種があり、都会生活者 (dwellers in towns) とテント生活者 (dwellers in tents) たる遊牧民 (nomads) とが区別され、ネドゥイン人とはアラブ語の badawin (pl. of badawiy, dweller in the desert, f. badwi, desert) に出でテント生活者たるアラブ人を意味する。しかるにイスラエル人は、普通、遊牧民でなく、テント生活をしない<sup>(3)</sup>。

(1) 使徒行伝18章3のギリシャ語本には *stenopoiot* (tentmakers) となっているが、新約聖書アラム語原書には、ラムサによれば、*lawlary* (saddle makers) となっており、またラムサによれば、「近東には幕屋つへり (tentmakers) といった職業はない。テントは家庭で女たちにより作られる。」と記されている (Lamsa, *New Testament Origin*, p. 94)。

しからばイスラエル人をヒクソス族と同一視するは無理であり、後説がイスラエル人の出エジプトを第19王朝の時代に認めて、多神教信者たるエジプト人の一神教信者たるイスラエル人圧迫に出エジプトの原因を認めたのは正しいであろう。しからばイスラエル人の入エジプトの時期をヒクソス王朝時代に認めるよりは世界においてイスラエル人とともに一番さきに一神教を認めたエジプトのアフリエンリアトン王の時代に認める方が適切であろう。

(1) イスラエル人とエジプトなど。広義のヘブライ人(ユダヤ人ともいう、のちのイスラエル人)の信仰は一神教で神の正義と愛を認めるも、選民 (*chosen people*) の觀念と結合していた。ヘブライ人はアブラハムによりカナンの地(のちのパレスチナ)に建国した以後にエジプトに秒住したが、モーセ一行の出エジプトまではいまだ國家組織を有しなかった。モーセの没後カナンの地にヘブライ國を建設し、モーセの律法により民主的神政政治を士師時代 (*period of judges*) に実現したが、連邦制をとっていた。その後、時経てそこに王制による單一國家を實現しこの政治機構はダビデ王のとき事実上確立したが、それは教政政治であり、他國への侵略を大に行つた。しかるにその後、國運衰え、北王国(イスラエル王国)と南王国(ユダヤ王国)に二分され、その後さらに北王国はアッシリヤ人のサルゴン(*Sargon*)王により、南王国はカルデア人(新バビロニア人)のネブカドネザル (*Nebuchadnezzar*) 王により征服せられ、北王国のあと、ガリラヤとサマリヤにはアッシリヤ人・カルデア人とそれらと同化したヘブライ人―狹義のイスラエル人―が住み、南王国のあとにはうえのごとき同化をしないヘブライ人―狹義のヘブライ人(ユダヤ人)―が住んだ。かかる亡國後、狹義のヘブライ人の信仰は、律法学者 (*scribes*) を中心とするパリサイびとを含めて正義一本の神を認める一神教に変じ、アッシリヤ人およびカルデア人に対する復讐の念に燃えた。新しい研究によれば、キリストはユダヤのベツレヘム (Bethlehem), (House of bread) に降誕されたのではなく、ガリラヤの Beth-a-fren (house of Abraham) に降誕されたことになっている (F. E. Hoyer, *Was Jesus really born in Bethlehem?*)。

なおヘブライ人は Diaspora のち近代におけるシオン主義 (Zionism) を経て、1948年パレスチナにイスラエル共和国 (Republic of Israel, State of I, [Heb] *Medinat Yisrael*) を建設したが、パレスチナは同年いらいイスラエル共和国とアラブ人地区に分れてゐる。

しかるにアフリエンリアトン王がその即位第17年頃(前1354年頃)に没し、その長女の夫たる第1養子 (the first

son-in-law) がそのあとを継承したが、その在位が極めて短く、ついで第2養子がアフニエンニアトン王の三女と結婚し、わずか10歳ぐらいで即位し、アトン信仰によってその名もトゥッタフニフニアメン (Twt·nb·jmn, Tut-anb·Aton, —Aton)——英語ではトゥータンカートン (トゥータンカーテン) (Tutankhaton, Tutankhaten)——と称した。しかしこの名はエジプト語で「生ける、アトンの像 (gd)」という義であり、一方においてアトン信仰ではアトンの化身としての国王を認めないから、この名によって王は実質的にはアトン信仰を捨てしめられたこととなる。その後、王はテーベの神官団の圧力に屈して形式的にもアトン信仰を捨てて古来のアモン信仰を国内に回復することとなり、自己の名もトゥッタフニフニアメン (トゥッタフニフニアメン) (Twt·nb·jmn, Tut-anb·Amon, —Amen)——英語ではトゥータンカーモン (トゥータンカーメン) (Tutankhamon, Tutankhamen)——と改め、首都をメムフィスからテーベにもどした。この王が即位第6年頃に没し、短期間、神官アヒ (Y?, [E] Aī, [E] Ay) が在位したが、この期間に旧アモン信仰が完全にその勢力を回復した。

しからばアフニエンニアトン王の崇高にして偉大な宗教改革が何故に失敗したのであろうか。これは古来存する弁神論 (theodicy)<sup>(1)</sup> に属し、この弁神論にここに必要なる範囲において触れて見ようと思う。

(1) 自著、フリステレーヌ政治学の基礎、24—26頁。

さて、ある出来ごとが起って、その内的原因も外的原因も人間にはどうしてもわからないとき、その出来ごとをわれわれは「偶然」と呼んでいる。それは自動的とも受動的とも考えられない。この「偶然」に当る英語は accident であり、ラテン語は casus である。こうした「偶然」のほか人間が予知できないものと、注意すればその出来ごとが予知できるが、予知しても客観的情况では個人にとってそれを避ける方法がない出来ごとがあり、「偶然」とこの

あとのもののそれぞれを不可抗力 (*vis maior*) といひ、それが個人の運命を決定するといわれる。

以上のごとき個人の運命—個人に対する不可抗力に関するボエティウス (*Boethius*) の見解をまず伺つて見る。これは古代ローマの哲学者であり、政治家であり、かれの見解はイギリスのアルフレッド大王 (*Alfred the Great*) とその普通法 (*the Common Law*) 観念に大きな影響を与えて、イギリス普通法史をその精神的基礎から理解するためには、アルフレッド大王のこの法観念とカヌート大王 (*Canut the Great*) の法観念<sup>(1)</sup>を理解せねばならぬ。

(1) 自作、「良心の自由」とイギリス法治のデンマーク元源 (関西大学法学論集 第12巻、伊沢孝平教授還暦記念特集 237—272頁)。

ボエティウスの考えによれば、「偶然」と感ぜられるのは神を考えないからであり、有神論的、理神論的に神を考え、かつ正義それ自身を究極目的とする神を考へるとき、「偶然」は神の摂理のすべてではないが、それはすべて摂理に属する。従つて人間の見た「偶然」は真の偶然ではなく、ボエティウスのいわゆる「摂理たる偶然」(*casus providentiae*) であり、この「偶然」以外の不可抗力としては個人がどうしても予知できないものと、予知しても避けられないものが存し、こうした「偶然」以外の不可抗力のうちには、また、*act of King's enemies* のうとき人為的のものもあり、*act of God* もある。このあとのものはすべて神の摂理である。しかるに神の摂理は無限であるが、個人の運命は有限であるから、この世における善人かならずしも幸運でなく、悪人かならずしも不幸ではない。

ボエティウスの弁神論を英法の用語を用いて説明すればうえのごとくなる。うえの「偶然」と *act of God* は有神論的、理神論的に神を考へるとき、神の意思 (*voluntas Dei*) である。また神が正義を目的とすることはわたくしも認める。しかし Unitarianism 的科学研究方法と三位一体的宗教的方法を尊重する立場においては、神は正義を目的とするが、正義それ自身が目的となるのではなく、正義は愛という目的的手段である。従つて神の摂理はかならず

しも無限でなく、しばしば有限である。しかし摂理はかならずしもこの世に現われず、その意味において善人かならずしも栄えず、悪人かならずしも禍を見ない。それとともに絶対愛を究極の目的とする神は正義の人のためではなく邪悪の人のために死し、ロマ書第5章7—8(アラム語原書)には「7それ邪悪の人(awaley)<sup>(1)</sup>のために死ぬるものはほとんどなし、善人のために死ぬることをいとわぬものやあらん。8されどわれらのなのおツミビトたりしとき、キリストわれらのために死に給いしによりて、神はわれらに対する愛をあらわし給えり。」と記され、キリストの十字架上の遺訓として「これわが連命なりき。」(アラム語原書)が残り、親鸞聖人(シンランシヨウニン)も源信をたたえた、正信偈(シヨウシンゲ)の一部で「一生造悪値弘誓(グゼイ)。至安養界(アンニョウガイ)証妙果。」<sup>(2)</sup>と詠じていられる。しからば十字架の天命が神の摂理としてでなく、それを受ける人間にとっていわゆる「偶然」として感ぜられることがあり、アフニエンリアテン王による、うえのごとき宗教改革の失敗もかかる十字架の天命ではなからうか。わたくしはかく論ずることによっても王の英霊に対するわれわれの感謝の一端を表したい、かかる論述によって王の英霊に対してボエティウスのいわゆる「哲学のなぐさめ」(consolatioe philosophiae)を与えるというよりは。

(1) 自著、アリストテレス政治学の基礎、(英文)79、80頁。

(2) Lemana shabakhani: 自著、前掲書、(英文)80頁。

(3) 自著、前掲書、(英文)79頁。

## B アリストテレス宗教・政治学の基礎としてのアフニエンリアトン王の宗教・政治思想

アフニエンリアトン王の宗教思想と政治思想はアリストテレスの宗教学と政治学のエン源をなしたと考える。この判断の根拠となる理由としては、(1)アフニエンリアトン王の認める太陽神象徴とアリストテレスの認めるその

関係を含む両者の宗教の比較と、(2)アレクサンドロス大王の遠征に基づくエジプト・ギリシャ文化交流の2を挙げる  
ことができた。

ここにまず第(1)の事情を論述する。アリストテレスはその認める太陽神の象徴として左回り万字 (Counter-clockwise fylfot) 卍を用いた。この種の万字をウェルズは *swastika* と称し、その起原を太陽巨石文化 (the heliolithic culture) に求めべきことを主張する。<sup>(1)</sup> そもそも万字に右回り万字 (clockwise fylfot) と左回り万字の2種があり、そのうち左回り万字を *swastika* と呼ぶべきか否かは後に論ずることとし、左回り万字の起原を太陽巨石文化に求めるのは無理であろう。

(1) H. G. Wells, *The New and Revised Outline of History*, p. 141.

まずエジプトの太陽巨石文化において太陽・太陽神ラー・昼などは大円のなかに小円を入れた象形文字 (hieroglyph) ㊦を表意文字 (ideograph) として用いて決定詞 (determinative) とし、この決定詞に先立って左横書きに表音文字 (phonetic) として用いた象形文字にて太陽の場合は *sw(w)* と記し、太陽神ラーの場合は *h* と記し、昼 (day) の場合は *hrw* と記入した。しからばうえの表意文字たる決定詞に左回り万字の起原を求めることができないとともに、その場合の太陽・太陽神ラーの表音文字もその形が左回り万字と全然関係がない。

つぎにエジプトの太陽巨石文化には、文字でもなく、また太陽または太陽神を意味する象徴でもないが、アンフ (Ankh) —— 英語ではアネク (ankh) —— という象徴が用いられた。これは丁字形の上に小円または横に小大円を置いたもの<sup>(2)</sup>であり、生命の象徴として広く用いられた。なおエジプトの太陽巨石文化には健康および幸福の象徴としてウシヤ (*wi'3, u'da*) —— ホルスの目の形とも云われる —— があり、アンフやウシヤなどはイーヴライ (the evil eye)<sup>(3)</sup>

に対する護符 (amulet, talisman, object as a protecting charm) と「*spell, word as a protecting charm*」とともに、広く用いられた。イーヴライとはひと目見ること (*a glance*) によって他人に物質的害悪 (material harm) を与える能力をいう。うえのアンフの「*T*」がローマ十字 (Roman cross) またはギリシヤ十字 (Greek cross) であれば、それがアリストテレスの左回り万字の起源であると考えられぬこともない。この「*T*」がローマ十字に変えられたものが、在来の形以外に用いられたのは、キリスト教がエジプトに伝来したいが、キリスト教の十字架象徴として用いられたのであり、従ってアリストテレス当時にはこのキリスト教象徴は存しなかった。

(1) 英語のイーヴライに似た英語シングライ (*a single eye*) がある。with a single eye とは「誠心誠意で」の意味。このシングライとは英訳 *of Matt. 6: 22* の “*thine eye be single*” の出所が、*ラム語原聖書の single* の当り個所には、*ラムサニ* といはれ *diseased* に対 *the bright, clean* の意味が記せられていゝとせらるゝ。

つぎにインカ帝国 (the Empire of the Incas) の太陽巨石文化では太陽の象徴は円周に密着した十文字 (ギリシヤ十字) が描かれているもの⊕である。従つてこの象徴にアリストテレスの左回り万字象徴の起原を求めると無理であろう。

しかるに一方アフニエン王の宮廷芸術家 (court artists) は、アトンがすでに記したごとく地平線のホルスたるラーの意味の別名を有するにかかわらず、この別名中に含まれたホルスの名によってホルスと混同せず、従つてアトンを「タカの頭ある」(hawk-headed) ものと表現せず、アトンを象徴するに太陽円盤 (Jin) を描き、この円盤から発射する多くの光線を数多い線で描いているが、この線とそれに関連するものとの総合した形状から、この総合形状は表音文字の、すなわち腕の表意文字と判断せられる。従つてその高くまくりあげられた腕の先に手が付けられ、かくて描かれた千手——千手観音を連想せしめる——のところどころが既述のアンフを握っており、円盤の中

央下部にはすべての腕に共通の衣服のソデが描かれていると判断せられる。ここまでの判断は誰にでもできる。しかしここにわたくしの初めてなした発見は、上の腕に付けた手が、中央の太陽円盤から見て、腕の表意文字を表からでなく裏から見た形で、左回りをなしていることである。もし表から見た形なら右回りであるはずである。しからばアト神の象徴をもっとも簡単化すると右回り万字とならず、左回り万字となる。しかるにアリストテレスの認める太陽神の象徴は左回り万字である。

なおアリストテレスの認めたこの象徴は原始キリスト教の採用するところとなったと考えられる。中国の景教（原始キリスト教）は左回り万字<sup>(1)</sup>を用いたが、原始キリスト教がヨーロッパおよび東洋において聖なる三脚とへソ石を象徴として用いたこと、愛の神を太陽をもって象徴したことにおいてアリストテレスの宗教の影響を受けていることを考えると、左回り万字もアリストテレスの用いた象徴の継承であると考えられるのほかない。ただし中国景教のこの象徴は、これを円内に入れて唐の則天武后が作った文字<sup>(2)</sup>が太陽を意味していらい、仏教の救済 (Sūtra-pāna) 門——浄土門より広い——においてその象徴とすることとなったため、中国の景教ははじめ広く世界の原始キリスト教——それは今日では東方カトリック教会 (Catholic Church of the East) の教義といわれる——は左回り万字に代わるものとして cross formée (= cross partée)  を用いるに至った。しかもこの cross formée はローマ十字でなくギリシヤ十字の割で上下左右均等の十字を用いているから、十字架の象徴というよりは太陽の象徴であると考える。

(1) 自著、アリストテレス政治学の基礎、37頁。

(2) 自著、前掲書、35頁以下。

(3) キリスト教の十字架は、エジプトにおける場合でも、従来のアンフを既述のごとく変形してローマ十字的にして左右均等なるも、上短下長の形をしている。

なお右回り万字 (clockwise fylfot) 卐は古代インドのヒンドゥー教アーリヤ人の間にその起源を有し、サンスクリットで *saustika* から *svastika* に転じた名称と *svayasa* の称がある。ゆえに左回り万字を英語で *swastika* という誤りである。うえの *saustika* は *sukha* (樂) + *astika* より生じ、*svayasa* は *sri* (E) + *Mr* + *vatsa* (こうし) より生じ、両語はともにまず、幸福 (吉祥) と生命を意味し、その立場において左回り万字は不幸と死を意味し、後に右回りは通俗ヒンドゥー教の男神をも意味したに対し、左回りは同教の女神をも意味した。仏教の解脱門は仏教の外形をとったウパニシャッド哲学であったから、右回り万字を吉祥の意味にとるとともにこの門の象徴として、中国に伝え、鑑真 (ガンジン) が来日したときこれを奈良の唐招提寺にもたらしした。この右回り万字が西洋に入るや、アーリヤ人優越の象徴とせられ、ナチスはこれを斜めとして、ドイツではユダヤ人迫害の象徴とし、アメリカでは黒人迫害の象徴とした。

左回り万字を右回り万字と比較しつつ以上のごとく考察するとき、アリストテレスの左回り万字の起源はアフエーン・アトン王にあるということが出来る。

なおアフエーン・アトン王の宗教・政治思想とアリストテレスの宗教・政治学を比較するに、(1)ともにうえのごとく愛を目的とする神 (創造神) を認める一神教を主張すること、(2)ともにこの神を太陽神とするが、それは自然神としての太陽神でなく、太陽をもって神の愛の現われと見る意味 (Unitarianism 的見解) で、太陽をもって神の象徴とするものであることにおいて一致する。(3)ともにうえの一神教に基づき祭政分離の平和政策を主張し、その結果、

王の場合、これを既述のごとき実行に移し、アリストテレースの思想の影響としてデルフォイ隣保同盟の人道主義を見る。ただアリストテレースの場合は神の創造を進化論と結合し、経験科学的説明を詳細に行っているが、アッヒエンニアトン王にはかかる学問的説明が少なく、ことに進化論的説明が全然ないように思われる。

(1) アリストテレースのこの点については、自著、アリストテレス政治学の基礎、28頁参照。

(2) これは古代ギリシャ諸国間に認められた戦時国際法規の人道性である(自著、アリストテレース政治学の基礎、82, 89頁)。

以上において本論説明の予定における(1)アッヒエンニアトン王の認める太陽神象徴とアリストテレースのその関係などを述べ終ったので、ここにこの予定の(2)アレクサンドロス大王の遠征に基づくエジプトとギリシャ文化交流を論ずる。とくに必要上、アリストテレース思想を中心として。

アレクサンドロス (Alexandros) 大王は前332年エジプトを無抵抗で征服し、直ちに商業都市アレクサンドリア (Alexandria) を造ったが、このときからギリシャ人がアレクサンドロスに代って課税と軍の支配のみを行った。このとき軍の支配をした主なる將軍であったプロトレマイオス (Ptolemaios) は前333年にアレクサンドロスが没して、その帝国が瓦解するや、プロトレマイオス王朝の始祖プロトレマイオス1世としてエジプトに君臨することとなった。しかるにこのプロトレマイオスはアリストテレースの信奉者であり、王に即位してのちアレクサンドリアに一大図書館と一大博物館を建設し、ギリシャ文化を大王の名にちなんだこの都市を中心として大いにエジプトに導入したが、このときアリストテレースの学問普及にとくに努力したと考える。

一方、アリストテレースはアレクサンドロス大王の師であったため、王の没したその年、教政政治主張のデーメーター僧らの策動で死刑を宣告され、カルキスへ逃げて翌年62歳でなくなっている。<sup>(1)</sup>しかし王の生前は、そのエジブ

ト征服から没するまでの約10年間、アリストテレースは満51歳の元氣盛りであり、しかも健康であり、王の師としては好遇されていたと考える。しからばこの10年間にプトレマイオスはその敬愛するアリストテレースのためエジプトの宗教・政治思想を少なからず提供したと考える。なんとなればプトレマイオスは一面エジプトの学芸を尊重してこの学芸の中心地ヘリウポリス(Heliopolis)——太陽神の都市を意味するギリシヤ語——を主として通じてエジプト学芸のギリシヤ導入に努力したことが明白であるからである。

(1) 自著、アリストテレース政治学の基礎、28頁。

以上の論述によってアフエンアトンの宗教・政治思想がアリストテレース宗教・政治学のエン源をなしたと主張する。一方において、すでに論述したごとく、アフエンアトン王による宗教改革の失敗という不幸は天命であった。しからば、この不幸は後年アリストテレースに大なる感動を与え、王の偉大なる着想をいっそう深める機縁となったのであり、そこに創造者たる、絶対愛の神の大いなる計らいがあると信ずる。

なおアリストテレースのうえのごとき宗教・政治思想はデルフォイ隣保同盟の精神となり、戦争法規における人道主義を実現したけれども、アリストテレースの不幸なる死によって、その偉大なる宗教改革とその成果も一時的に過ぎなかった。これもアフエンアトン王の場合のごとく天命であると考えざるをえない。しかし戦争におけるもっとも残虐なる行為をきよくくりよく避けようとする努力が1899年にハーグ(Den Haag)における空爆禁止宣言(Declaration against the throwing of missiles from balloons, etc.)となった。しからばこの宣言はアリストテレースの崇高なる人道主義がデルフォイ隣保同盟の戦争法規を通じて影響したものであり、そこにもまた創造者の大いなる計らいがあると信ずる。

(1) 自著、アリストテレス政治学の基礎、58, 59頁。

ただ悲しいかな、この宣言はわずからカ年のあいだ有効であった国際条約に過ぎず、その後はかかる空爆禁止の企てはすべて失散に帰しているどころか、史上空前の無差別大量殺人がアメリカによる広島・長崎に対する原爆投下によって行われた。しかもそれは正義の名によって行われた。かかる事態は近代列強の大多数がめざす正義にたとえ愛の基礎はあっても、アリストテレスの認める、アポロの愛——あらゆる人間の自然本性 (physis) に存する愛を基礎としないためである。そもそもいわゆる仏教——真の仏教ではない——の欠点は愛の創造神を認める一神教でないことであり、いわゆるキリスト教——真のキリスト教ではない——の欠点は、正義の基礎に愛を認めながらもあらゆる人間に平等なる自然本性を見のがし、ユダヤ人的、Puritan 的選民 (chosen people) 的錯覚に陥る点にある。

もちろん、同じく「文化」と訳される英語の culture, フランス語の culture, ドイツ語の Kultur にはその意味の区別があり、英語には“human culture” (人類文化) という熟語があり、それは平等なる、人間の自然本性を前提とする個人の教養 (culture) を集合的に見た観念を現わし、広い意味の culture は個別的に見た個人の教養のほかこの human culture を含んでゐる。従つて human culture は cultural or social anthropology の文化 ethnography よりもむしろ ethnology に関係深く、human culture は発達するものであり、そのとくに発達した国家を cultural or civilized state とし、かくつて cultural state は Kulturstaat と混同するべきでなく、後者はまた Rechtsstaat と区別される。うえの二つを human culture の観念はいわゆるキリスト教の欠点を補うものであるが、Puritan 観念の強いところには繁榮せず、そこにわれわれの大いなる悩みがある。しかしキリスト教大国のうちにおいてイギリスにはうえの human culture の観念が human nature の観念とともに存する。このイギリスに課されたる天の使命や

重かつ大なりと言わねばならない。

- (1) 自著、英国刑事公民政治史序説（38年版）、付録、二一〇頁。
- (2) わが国にも存する「British Council」は英国文化協会と訳されるも、それは英国・文化協会の義であり、英国文化・協会ではない。